

JBIA 洋書輸入協会会報

Vol. 30 No. 11 (通巻354号) 1996年11月

フランクフルト・ブックフェア見聞記

インターナレッジ・ブックス 塚本正広

恒例のフランクフルト・ブックフェアも今年で48回目にあたり、10月2日から7日のほぼ一週間にわたってメッセ会場の大部分を使って開催された。私にとっては3年ぶり、3度目の参加なので過去数年のブックフェアと比較して云々することはできないが今回のブックフェアで気がついたことなど思いつくままに書いてみたい。

フランクフルト・ブックフェアが開催される10月は我々にとって決して暇な時期ではなく、せめて比較的時間のゆとりのある9月初旬にでも開かれればと思うのだがこればかりはこちらの思いどおりにはゆかず、そのうえ期間中はホテルがどこも満室でしかも非常に割高なことを考えるとどうしてもためらいがちになってしまうのは私だけではないだろう。今回もホテルが予約できずにメイン川に停泊する観光船に宿泊している参加者もいたほどで新しいホテルが建設中とも聞くがホテルの問題はこれからもしばらくは解決の見通しはないように思われる。それにしても世界最大のブックフェアとなればあらゆるビジネス・チャンスの可能性があるわけであり、数年振りにあちこちで懐かしい旧友と出会えるのもフランクフルトならではのことといえよう。気候の変化が激しいこの時期にはめずらしいほど今回は天候に恵まれ、念のために持参したコートも不要であったことは参加者には幸いなことであり、メッセで一仕事を終えた後、秋たけなわのフランクフルトを充分に楽しむことができたように思われる。

主催者側の発表によると今回の参加社は6,819社(う

ちドイツ以外の参加社は4,280社)、ブックフェアのために使われたホールも3番ホールから9番ホールまでと昨年と比べてフロアーの面積もほぼ28%増とのことで正面入り口からアメリカ、イギリス、日本等の各出版社のスタンドがある8、9番ホールまで歩いて10分以上かかるほどで会場内を巡回するシャトルバスを利用したのも私には初めてのことであった。毎年フランクフルト・ブックフェアはテーマを決めて開催されるが今年は『アイルランドとその離散』がテーマで古い聖書やイエーツ・ジョイス等の書籍が展示されていた他、アイルランド民謡や踊り等の催しが開かれていたが一日中会場をあちこち歩き回っている私にとってはゆっくり足を止めることができなかったことは少々心残りだった。

フランクフルトでいつも話題になるのが分野別、国別のホールの配分の問題であろう。会場内の各ホールは美術、エレクトロニック、メディア、理工医学(STM)、児童書等の分野別、及びドイツその他の各国別に割り当てられているが、今年はホール内の通路をこれまでよりも比較的ゆったりととり、大手のスタンドはオープンスペースにしたために全体的にゆとりがあるように思われ、そのために使用するホールの数も全体のスペースもこれまでよりもゆったりとしているように感じられた。数あるホールの中でも一番賑わっていたのがアメリカ、イギリスのスタンドが集中する8番ホール。とりわけランダムハウス、サイモン・シュスター等のTrade Bookの出版社がオープンスペースのゆったりとしたスペースに

目次

フランクフルトブックフェア	1	海外ニュース	3	出版文化史逍遙(11)	7
理事会報告	3	「通じない英語」	4	広告	8
お知らせ	3	文化厚生委員会だより	6		

版權や共同出版に関するビジネスがフランクフルト・ブックフェア本来のビジネスとはいえ多くの学術専門書を出版しているオックスフォード、ケンブリッジ等の大学出版局も Trade Book を前面に陳列してかなり派手なスタンドを設けていたのも学術専門書よりも一般書を重視する傾向の表れなのかもしれない。一方、アメリカ、イギリス以外の出版社のホールは8番ホールと比べて疎外されているように思われるのは単にホールの配分と位置の問題だけではないのかもしれないが、その他の海外からの出展社からは今回のスペース・プランについてかなりの不満があったようである。理工医学 (STM) 等の専門書の出版社のブースは4番ホールの3階 (Hall 4.2) に設けられていたが、理工学系の大手出版社で当然 Hall 4.2 に出展しても良いと思われるアメリカ、イギリスの出版社も8番ホールに出ているところが多く、そのためもあってか Hall 4.2 は人通りも予想よりも少なく、8番ホールの賑わいとは比べるべくもない。近年アメリカ、ヨーロッパでも図書予算の伸び悩みを耳にして久しいが、JBIA のメンバーの多くが学術専門書の輸入を中心としていることからしてもいささか残念に思われることであった。

この他今回のブックフェアで目をひいたものとして4番ホールの1、2階を占めるエレクトロニック・メディア (所謂ニューメディア) のフロアーをあげるべきであろう。このところエレクトロニック・メディア、特に CD-ROM の普及は特筆すべきものがあるが、ほぼ500社に近いブースが立ち並び、このフロアーでは書籍よりもデモンストレーション用のコンピュータのほうが多かったのではないだろうか。このフロアーに出展しているほぼ7割が地元ドイツからでそのほとんどがゲーム用の CD-ROM を派手に宣伝していたが、このフロアーを見る限りまるでエレクトロニクス・ショーにでも迷い込んだような錯覚を覚えたのは私だけではないだろう。これも時代の流れと言うべきかもしれないが、ゲームソフトはともかくとして CD-ROM のもつ膨大な情報量と検索の便利さ、文字だけではなく画像と音声を同時に取り入れたまさにマルチメディアの現状とその未来の姿の一端を見せつけられた思いがする。CD-ROM とならんで今回のブックフェアでの初めての試みとしてこのフロアにインターネット・カフェが設けられ、版權の取り引きでも始めてインターネット・オークションが導入されたこともあげるべきだろう。コンピュータ・サイエンス

の国際会議でインターネットカフェを設けることは最近当たり前のことになってきているが、前述の CD-ROM と並んでインターネットの急速な普及には目を見張るものがある。かつてマイクロフィルム、マイクロフィッシュが出始めた頃、今後印刷物の多くにとって代わるのではないかと言われたことがあったが、インターネット・ジャーナルが出始めていることを考えると CD-ROM、インターネットのほうがはるかにインパクトが大きいのではないかと改めて考えさせられる。ただビジネスとしてみると CD-ROM ではゲームとグラフィックス関係が現在のところ中心になっており、インターネットでは個人のプライバシー保護と決済に関する問題が残されているようだが、今後はこれまでの印刷物に対する最大の脅威になるのではないだろうか。

最後に、ブックフェアで日本のマーケットを知っている数人の出版社の人達から聞かれたことに紀伊国屋書店の JBIA 脱会問題がある。Publishers Weekly の記事で日本通のほとんどが既知っていることではあるが、彼等が一番知りたがっていたことは JBIA 脱会の裏にはどんな問題があったのか、それとその他の JBIA のメンバーが大々的に Baker&Taylor 等のジョバーを通じて輸入する方向に向かっているかどうかと言うことのものである。JBIA 脱会の裏に何かあったかは我々にも正確に知る由もないが、International Division のマネジャーにとってはジョバー経由の発注が一般的になればその売り上げが彼らにクレジットされないためにこれは彼等にとって大きな関心事であることは容易に理解できる。今回のブックフェアは紀伊国屋書店新宿南口店の開店とぶつかったために紀伊国屋書店からの常連の参加者が少なかったようだが、そのことがさらに海外の出版社のこうした憶測を招く結果になったのかもしれない。それにしてもこの問題が我々 JBIA のメンバーだけのことでなく、国際的な関心を引き起こしていることを実感させられたのはさすがフランクフルト・ブックフェアならではの改めて感心したことであった。



理事会報告

10月25日(金)

㊦ 9 月分収支報告

10月17日(木)開催の総務委員会で審議の9月分収支について総務委員長の報告を承認した。

㊧ PW への抗議文

前月号で既報の抗議文を10月7日付 PW 誌宛郵送したが、10月末日現在未回答のため内容を変え近日中に再度発送することとした。

㊨ 委員会報告

イ. 総務委員会

1997年度定時総会は例年通り懇親旅行会を兼ねて行う旨提案し承認された。

ロ. 会報委員会

昭和60(1985)年9月号より11年間毎月掲載した相良顧問執筆の洋書輸入協会史が10月を以て終了。2ページ分は取り敢えず筑波大学の島岡名誉教授に執筆を依頼しカバーする。

ハ. ダイレクトリー委員会

10月16日(水)開催の委員会で1997年度のダイレクトリーについては従来通り Agent List を含めて作成することを決定した。

ニ. 文化厚生委員会

1997年度賀詞交換会は皇居前のパレスホテルで1月8日(水)開催する。

なお、総会も含めて関西地区等遠隔地の会員が参加を希望する場合は交通費の負担について改めて検討したい。

お知らせ

至成堂書店・堀会長にドイツ政府より功労章

ベルゼンブラット(ドイツ出版協会報)10月25日号によれば、株式会社至成堂書店(京都)取締役会長、堀秀光氏にこのたびドイツ政府より、同氏の日本におけるドイツ文学の普及への貢献、ならびに長年の日独文化交流に関する尽力を称えて Bundesverdienstkreuz am Bande(ドイツ連邦共和国功労十字勲章)が授与された。

[なお仄聞するとことによれば、今回の叙勲については、ドイツ出版協会会長G. クルツェ氏およびエンデルレ書店社長H. エンデルレ氏が尽力された由。]

海外ニュース

帰ってきたブックフェア

旧ユーゴスラビアへの国際的な制裁措置のため中断されていたベオグラード・ブックフェアが、今年10月22日に四年ぶりに開催された。これは一時期ヨーロッパ最大のブックフェアのひとつとして、東欧諸国の市場に重きをなして来た。今回再開されたフェアは、1980年代後半のころの規模ではないにしろ、4つのホールに世界10カ国から326の参加者を得て開かれた。参加国としては、イギリス・アメリカ・ドイツ・オランダのほか、旧ユーゴスラビアから独立した諸国などがあつた。

参加者のほとんどが自国内の市場を当てにしているのが現状ではあるが、制裁措置が解かれたことにより今後このイベントが国際的な地位を再度確立できるのではないかと、主催者側は希望的な見方をしている。ベオグラードのNOVA EUROPA社は、ユーゴスラビアで最近出版され大成功した書籍を展示した。フェアの一週間に出版された“General Mladic”(ムラヂッチ將軍)は、ベオグラードのジャーナリストLiljana Bulatovicによるアンソロジーで、ボスニアのセルビア人勢力の悪名高い軍人指導者に関する情報を集めたものである。この本はフェア開催前に完売し、フェア初日に版元代表のSlobodan Filiminovic氏は4,000部を再販すると発表した。同社のスタンドには、視覚的でパルチザンの要素もある小説“The Bloodstained Hands of Islam”(イスラムの血塗られた手)も並んだ。同書はユーゴスラビアのセルビア人たちの間で1,000部売れ、オースト

ラリアで英語版1,500部が売れた。「オーストラリアには多数のセルビア人が住んでいて、セルビア語は話せないが自国の情報を切望している」と Filiminovic 氏は語った。

NOVA EUTOPIA 社のスタンドから数ヤード離れた場所にはイランの文化センターがあるが、彼らはセルビア出版社の派手な様子を気にもとめてないかのように見えた。イギリスの出版社はブリティッシュ・カウンシルの合同ブースと、ノッティンガムとベオグラードを拠点に最近設立された THE ENGLISH BOOK 社のブースで展示された。THE ENGLISH BOOK 社は8ヵ月

前に設立された出版社で、OXFORD U.P. の出版物を旧ユーゴスラビア地域に供給している。同社代表の Lauchlan Taylor 氏はフェア3日目に「我々のブースには、商業出版社、学生、学術関係社などが訪れ、大変な賑わいである」と語った。

セルビアおよびモンテネグロでの商売上のネックは、外国通貨の不足という点である。書籍は現地通貨のディナール（他通貨への交換が不可）で取り引きされることが多いが、THE BRITISH BOOK 社は輸入代金をユーゴ製Tシャツ輸入で決済する方法をとっている。

—THE BOOKSELLER/NOV. 1, 1996より抜粋—

「通じない英語」の悩みを解消しよう

—「近似カナ表記」を手がかりとして—

島 岡 丘

アメリカで通じなかった英語

私が若い頃に、はじめてアメリカに渡った時のショックは文化的というよりはむしろ言語的なほうが強かったのではないと思う。

われわれ一行は、一流のホテルに泊められたが、その朝食は高そうだからというので、近くのドラッグストアに行くことに決めた。そこのカウンターのところ腰掛けて、朝食を注文したときのことである。友だちが牛乳を飲みたいと思って、

“Milk, please.”

と頼んだところ、女主人は“O.K.”と言って持ってきたのは、牛乳ではなくメニューだった。milk という簡単な言葉でも相手に伝わらないのを知って、これから先、数ヵ月アメリカの滞在がとても不安になった。しかしそれと同時に、これからアメリカ英語の音声特徴をよく研究し、英語が通じなくて困る日本人のためにも、何らかの具体的なアドバイスができればよになりたいとも思った。

それから何十年か過ぎ、振り返って見ると、自分の進んできた道は、主に大学生の英語発音指導と音声学研究であった。今もし、milk を正しくアメリカで通じさせるにはどうすればよいかと聞かれたなら、おそらく次のようにアドバイスをするだろう。

Milk の発音をカタカナで

Milk を通じさせるには「ミールーク」と3音節で言うとき me-room-coo のように聞こえたり、やや早く言

うと上に述べたように「メニュー」のように聞こえたりするので、出だしを強く、終わりを弱く、

「メウ」

のように言いなさいと忠告するだろう。すると、おそらく、なぜ [l] を「ウ」のようにするのかと聞くだろう。その問いに対しては、母音の後の dark l は日本語の「ウ」が近いので安心して日本語を使いなさい、と答える。さらに質問者はなぜ「ミウク」ではなく、「ミ」を「メ」にするのかと聞くかもしれない。これに対する答えはやや専門的になるが、[l] はその先行する母音を軟口蓋化 (velarization) する、つまり、奥舌の上昇によって口がやや開き、「イ」のような狭母音が広母音化するからである。では、bill と bell がどちらも「ベウ」になるのかと聞かれると、これは一緒にならないと答えたい。実は、去年夏サンディエゴで TESOL 大会に参加した際、ホテルでささやかな実験を試みた。レストランのウェ이터に、思い切って「ベウ」と言ってみた。するとそのウェ이터はベルがどうかしたのかとあたりを見回したのである。やはり、似たことば同士ははっきり区別して発音すべきだと感じ取った。

発音指導が欠落した現行カリキュラム

それにしても小学校あるいは中学初級の教科書にある milk のようなやさしい単語が通じなくて困る事態が生じるのは何に由来するのだろうか。学生時代を振り返ると中学や高校で莫大な時間を英語の勉強に費やし、さらに大学やその他の機関で英語を学んでいるのにである。

最近聞いた話であるが、ある国際会議で日本の偉い学者が英語で研究結果を発表したが、居合わせた外国の人たちは、誰もその学者が英語を話しているとは気づかず、時折英語に近い日本語があるとは思わなかったそうである。

文部省の指導要領を見ても、l と r、th と s、B と V、G と Z、強形と弱形などの区別をするようにとは書かれておらず、すべて教師の判断に任せられているのが現状だ。さらにどのような順で発音を身につければ自信の持てる発音になるかについても何も示されていない。重点は文法文型と必修語であり、文字が違えば発音は特に注意しなくてもよいという雰囲気である。例えば、日本人なら誰でも言えるとされる This is a pen. だが、th は歯間で発音し、i は日本語の「イ」違って「エ」に近い母音であり、This-is-a は子音+母音の連続であるので自然につながる。また、a はあいまいな弱い母音であり、pen の p は息も同時に出る帯気音の無声破裂音、さらに最後の n は舌先が歯茎について出る鼻音であるなど知っておくべきことであるが、文字さえ覚えておけば何とかなるという表意文字文化への甘えがあるような気がする。

よい発音からの再出発

私は英語の力を本当につけるためには、多く英語の本を読むことは当然として、よい発音でよい題材を音読するべきであると思っている。私は Reading Aloud With Good Accent の頭文字をつなげて、RAWGA と名付けている。

ではよい発音を身につけるにはどうするかということであるが、まず日本語を最大限活用せよと言いたい。「近似カナ表記」でさきほど見たようにまず通じる段階に到達できると思われる。

今年発足した「英語発音・表記学会」(English Pronunciation and Transcription Association [EPTA]) (事務局：茨城キリスト教大学) のような学会が遅れている英語発音指導に貢献することが望まれる。

外国語習得手段としてのカタカナ表記の工夫

日本語のカタカナが考案されたのは平安時代の初期で、院政時代に現在のようなカタカナになったとされる(広辞苑)。カタカナの特徴は子音と母音を一文字とした音節文字である。これは開音節構造を基本とする日本語の音韻体系とよく合致している。英語には子音+母音+子音のいわゆる閉音節構造が多いが、カタカナでどれだけ

英語音の近似値に迫れるかが私の課題であった。Thank you の 2 語のつながりの部分は、「キュ」と書けるので、「_{xx}アン[^]キュウ」と示せば、英語母語話者に十分通じさせることができるし、a cup of tea は「_{xx}アカッ[^]パ[^]テイー」で自然な英語を示すことさえできる(D.Crystal によれば、英語母語話者の10人中9人までは of の f を脱落させるそうだ)。

昭和20年に戦争が終わり、英語ブームが起こったが、英語の入門期の学習はアルファベットと IPA の発音記号であり、Jack and Betty の教科書には Japan ということは1回も出ていなかった。また、英語の学習にカタカナを活用することは悪とされた。そのため、単語や発音記号が読めなくて自学自習できない学習者は、落ちこぼれになることが少なくなかった。私自信も落ちこぼれになりかけた記憶がある。

私は英語の学習が苦手の人や英語の発音に自信がない人、さらに小学校4年頃から英語を始める生徒にカタカナの活用を勧めてきた。これは自転車を乗り始める人のための補助車輪のようなものだ。つまり、検定教科書や学習辞典にある IPA 発音記号を解釈できる学習者が少ない以上、日本語を単語とする人なら誰でも使えるカタカナを工夫したらどうかということである。多少のずれがあっても英語母語話者に通じさせ得るという自信を学習者に与えたいものだ。

「近似カナ表記」に対する学生の意見をアンケートで調べると、9割9分の学生が「近似カナ表記」に賛同していることが明らかになった。私の試みは母音間の区別(例：cat/cut はケアッ／カット)と子音間の区別、l と r (例：light/right は_{xx}ライト／_{xx}ライト)、th と s (例：think/sink は_{xx}インク／_{xx}シンク)、などすべて英語の音素対立はカナで区別し、さらに子音連結(例：try は「チュアイ」)、語と語のつながり(例：did you は「ディ[^]デュ」)、強形と弱形(例：some は「サム：スム」)など文レベルの近似カナ表記も試みた。G と Z の区別も「ディー」と「ズイー」とで区別ができ、英語の苦手意識が解消することを期待している。その後、卒業論文や修士論文に「近似カナ表記」をテーマにした教養子も現れたが、さらに、「最適カナ表記」に至るよう望みたい。

近似カナ表記の出版物

近似カナ表記の原型は、1994年に筑波大学に提出した博士申請論文、『中間語の音声学—英語の「近似カナ表

記システム」の確立と活用』（小学館プロダクション）であるが、学習手段として近似カナ表記を用いた書物は、『島岡メソッドわかる通じる英会話』（創拓社）、『通じる英会話はカタカナで』（日本事業出版社）、『発音・聞き取り上達辞典』（アルク）がある。CAI 教材では、『高校英語：Grammar and Composition』（TDK）と『高校英語：Reading and Communication』（TDK）がある。後者にはさらにリズム表記を加味したのでさらにカナ表記が読みやすくなったと思う。親子が共に楽しく学ぶことを想定した、小学館発行のリトルスターシリーズは鳥飼玖美子さんと飯田貴子さんとの共著だが、『リトルスター英絵辞典』（CD-ROM 付きもある）と『リトルスター英会話辞典』（CD 付き）が特に好評のようだ。

英語をカナで表す試みは歴史的には長浜万治郎の表記、車夫の英語、斉藤秀三郎の表記平川唯一の表記などがあったが、いずれも歴史的出来事として、英語教育界には定着しなかった。今回は幸いにも多くの方々の支持を受けているので、ぜひカナ表記システムを確立させ、発音記号や発音で苦勞する日本人の英語学習者がもっと気楽

に英語を発音し、音声に自信をもつようになってもらいたいと切望する。近似カナ表記によって、「ジ」と「ヂ」、「ズ」と「ヅ」の区別も再生でき、大／小、太い／細い、の4通り区別することで、カナ文字による外国語の音声表記の可能性を一挙に4倍以上に拡大できるようになる。

将来の展望

最近、日本の若い英語教育関係者の中には、自ら英語教材を書こうとする意欲を持ち始めていることは大変結構なことである。私自信もかなり前に Moonlight Princess and Other Stories を Macmillan 社から出版し（現在、Prentice Hall 社より）、また、近々、アメリカ女流作家としても知られている、Nina Weinstein 氏（Whadda ya say? の著者で Sunshine English Course の校閲者）と共著で、McGraw Hill 社より異文化衝突とその解決をテーマとした国際的 EFL 教材（上下2巻）を出版する予定である。近似カナ表記で英語発音のコンプレックスを克服し、母語話者と密接な話し合いをしながら、国際語化した英語の学習に適する EFL 教材の執筆者がさらに生まれることを望みたい。

（筑波大学名誉教授、茨城キリスト教大学教授）

文化厚生委員会だより

第 81 回 72 会ゴルフコンペ

玉造ゴルフ倶楽部榎木コース 1996 年 10 月 17 日（木）

秋晴れのおだやかな一日。常磐道から霞ヶ浦の北東側を巡って30分程の行程。参加はすこし少な目の14人ながら、終始賑やかな楽しいコンペでした。風もなく、言い訳の仕様もない様な絶好のゴルフ日和で好スコアが期待されました。ところが、距離の長い、うねりのあるフェアウェイ、バンカーと池が巧みに組み込まれ変化に富んだ難しいコース。広くてアンジェレーションに富む早いグリーンに、皆さん手こずられた様でした。

初参加ながら、ドラコン、ニアピンも併せて獲得された丸善の長山さん。ドライバー、セカンドと素晴らしいショットを披露され、美事な優勝でした。2位も丸善の松浦さん。初参加で先輩の方々に逢うのを楽しみに参加されたとの事でした。3位には、当コースの評議委員も務められる笠原さん（丸善 OB）。ゴルフをやっていると生意気と言われた頃から丸善のゴルフ部に居らしたそう、キャリアを発揮されました。取り切り戦は、池田さん（極東）が、僅差で諏訪さん（丸善）に競り勝ち優

勝カップを獲得されました。

今回は丸善の方々の活躍が見事でした。次回の12月12日（木）、鶴さん（東亜ブック）のホームコース高根 CC では、更に多数の会員の参加、活躍を期待したいと思います。

成績表	G	HC	NET
優勝 長山卓郎（丸善）	100	20	80
2 位 松浦拓己（丸善）	100	20	80
3 位 笠原光男（丸善 OB）	98	14	84
4 位 竹村政彦（丸善 OB）	97	12	85
5 位 三宅昭三（丸善 OB）	92	6	86
ベストグロス 三宅昭三（丸善 OB）	G92		
ドラコン 長山卓郎（丸善）	竹村政彦（丸善 OB）		
	池田篤治（極東） 豊泉弘（大洋交易）		
ニアピン 長山卓郎（丸善）	諏訪弘史（丸善）		
	西山久吉（西山洋書）		

（H.N.記）

英語辞書の歴史—ジョンソン・ウェブスター・OED—(2)

丸善・本の図書館 鈴木 陽 二

◆ジョンソン辞書の編纂

この時代の大規模出版物は1出版社が単独でその事業を行うのではなく、数社が協同で出版することが通例であった。ジョンソン辞書の場合も、5社による協同出版であった。

ジョンソンの回顧談によると、ドッツリーの提案以前から彼自身辞書編纂の考えを抱いていたのであったが、しかし、ドッツリーの話にすぐ乗ったわけではなくいったんは否定的な答えを行ったようである。そして、結局7人(5社)の出版業者の提案によって1746年に1,575ポンドという金額で契約を結ぶことになった。この金額は前回触れたように、辞書を3年で完成させることを予定した費用であったが、実際には9年の歳月を費やすことになった。これらの出版業者の中で今日も健在なのはLongmanただ1社のみである。

1724年に創立した「ロングマン」社はイギリスの商業出版社の中で最も長い歴史をもっているといわれているが、創業後間もない1728年には近代的百科辞典の嚆矢『チェンバース・サイクロペディア』の発行者の一人となっており、ジョンソンの辞書と併せて時代を画する重要な事典・辞書の出版元として、その歴史の中に不滅の業績を残した出版者である。

さて、これもこの時代の通例であるが、大きな出版事業を手がける場合有名人をパトロンにすることが多く、ジョンソン自身は余り乗り気ではなかったが、ドッツリーの意向でチェスターフィールド伯爵(イギリスの有力な政治家)に依頼することになった。このことで伯爵とジョンソンとの間に確執が生まれ、両者の関係を巡る有名な逸話が残されている。それは、パトロンを頼んだときに冷たくあしらわれてわずか10ポンドを下賜されたことが腹に据えかね、彼の辞書で“PATRON”の語義として「援助、支持、保護する人。通常横柄な態度で人を支援し、お世辞で報酬を受ける卑劣漢」と定義した。また辞書の完成間近のころ、ドッツリーが宣伝のために彼の発行している雑誌“The World”にチェスターフィールド伯爵の寄稿を求めたところ、伯爵の文章はジョンソン辞書を称賛するものであった。ジョンソンは今

ろ何をという気持ちになったであろうか、早速抗議の手紙を送ったが、それには「御玄関先にて拒絶の命に接し」とか「寸毫の補助を受けず、一言の奨励を蒙らず」「庇護者とは人の将に溺れんとする折を冷眼に看過し、漸く岸に泳ぎ付きたる折を見計って、わざと邪魔ともなるべき援助をを与えらるゝものに候や」(夏目漱石の訳文)などという文句を並べて噛みついてる。

ともあれ、ジョンソンは1747年に『英語辞書計画』という、辞書編纂のための基本方針を整理した論文を執筆して公表したあと作業を開始しているが、6人の書記を雇い、フリート街のガフ・スクウェアにあった4階建ての建物のなかに編集室を設けた。この建物は現在でもジョンソン記念館として保存されており、参観することができる。

さて、40名のスタッフと40年の歳月を費やして完成した『アカデミー・フランセーズ辞書』に対してジョンソンは1人で3年あれば完成すると公言し、1,600人対3という比率についてフランス人とイギリス人の力量の差はこんなものであると豪語して(ボズウェル『サミュエル・ジョンソン伝』)編集に着手した。結局6人の書記を使用し、3年の予定が3倍の9年を経て完成したのであった。その編集テンポは目ざましいもので、1748年には書記による引用例文の書き写しが終わり、1749年9月ごろに1部分の印刷の準備がととのい、1750年10月ごろには120シートが刷り上がり、1753年には第2巻の編纂が始められていた。そして1754年の夏には編集が終了して1755年4月15日に遂に上梓したのであった。辞書の編纂は例外なく長期間を要するといってもよく、大英博物館(1759年公開)もまだ開設されていなかったこの時代の状況を考えると、例文の選定一つとってみても、文献を収集して目を通し、用例を決めて抜き書きするという作業の困難さは想像に余りある。

次回に詳しく述べることになるが、この辞書を制作するに当たってジョンソンはベイリーの“Dictionarium Britannicum”を下敷きにした。そういう種本を使用したにしても、この大事業を短期日に完遂させた彼の超人的な仕事ぶりに驚嘆するばかりである。

完結記念特価セール

ドゥーデンドイツ語大辞典 第2版、全8巻

DUDEN-Das große Wörterbuch der deutschen Sprache
in 8 Bänden

2., völlig neu bearbeitete und erweiterte Auflage

約4,000ページ、18.0×24.5 cm

セット価格 ¥55,000

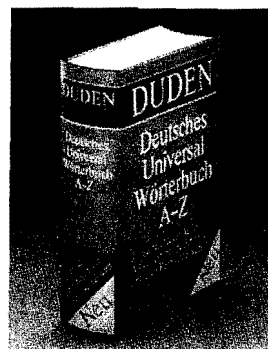
◎特価セール期間 平成8年12月31日まで

O.E.D.に匹敵する権威ある辞典

図書館に、書齋に是非お備え下さい



DUDEN-Deutsches
Universal wörterbuch A-Z
12,000語収録 ISBN: 3-411-05503-0
1,816 ページ、16.5×24 cm
＜＜9月出版予定＞＞ 価格 ¥6,230



(Bibliographisches Institut/Mannheim)

輸入総代理店

日本出版貿易株式会社

本社

〒101 東京都千代田区猿楽町1-2-1
TEL (03)3292-3753
FAX (03)3292-0410
e-mail: jpt@po.ijinet. or jp
NIFTY-serve: LDM05473

大阪営業所

〒532 大阪市淀川区西中島3-5-2
新屋第10ビル404号
TEL (06)886-7177
FAX (06)886-7166
e-mail: jptosaka@po.ijinet. or jp

九州営業所

〒812 福岡市東区馬出5-40-11
前田ビル内
TEL (092)651-3785
FAX (092)651-1191
e-mail: jptkyu@po.ijinet. or jp
NIFTY-serve: LDS00634

1996年11月 通巻第354号 洋書輸入協会
〒103 東京都中央区日本橋1-21-4 千代田会館5階20号室

編集者 神田 俊二

☎(03) 3271-6901 FAX. (03) 3271-6920

印刷所—藤本綜合印刷株式会社